

## 自己教育力の動機づけとその効果 — 自己教育力研究会の設立と概観 —

西谷美幸	永田華千代	徳永郁子	大澤早苗
岩瀬裕子	内山久美	梅橋操子	亀山亜弓
川端伸次	川本起久子	北野正文	古賀和子
嶋田かをる	多久島寛孝	田中英子	三村孝俊
山口裕子	弓掛和恵	吉田一子	山本勝則
井上悦子			

大学教育は、相当の自学自習を前提として成り立つものであり、学生にとって、自ら学ぶ力は欠かせない。従って、自ら学ぶ力つまり「自己教育力」を考慮した教育が必要になる。そこで、「自己教育力」について『医学中央雑誌』を中心に文献検索を行い、明らかになっている内容を検討した。そして、以下のような今後に残された課題が明らかになった。

- 1) 看護教育の領域では自己教育力に関する調査研究が活発に行われてきているが、他の医療の領域における研究はほとんど見当たらない。看護教育以外の領域（たとえば医療技術教育など）での調査、およびそれらと看護教育で得られた知見との比較が必要である。
- 2) 自己教育力に関する学年間の比較は行われているが、縦断的な研究への取り組みがほとんど行われていない。同一対象についての長期的変化を追う必要がある。
- 3) 自己教育力のイベントの影響に関する諸研究は多くないが、それらはほとんど臨地実習の影響を対象としている。学生生活における自己教育力育成の契機を更に検討していくために、それ以外のイベントの影響を短期・長期的に観察・調査する必要がある。
- 4) 梶田（1985）が提唱した自己教育力の四側面の一つである「自信・プライド・安定性」側面が、臨地実習後に低下したという報告と、上昇したという報告がある。この一見相反する結果が問題の重層性を反映していると考え、更に影響因子の分析をすすめる必要がある。

キーワード：自己教育力，臨床検査技師学生，看護学生，教育効果

### I. 緒言

中央教育審議会の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の答申では、「生きる力」を養成することの必要性が再三指摘された。しかし、生活様式の変動や価値観の多様化した現代においては、もう一步踏み込んで、「生き抜く力」が必要であると言えるだろう。この「生き抜く力」を持つためには、環境の変化に対応できるように自己を教育する力、つまり「自己教育力」が必要になる。自己教育力は、1983年11月、中央教育審議会教育内容等小委員会の「審議経過報告」において提唱された。この中で、自己教育力は主体的に学ぶ意志、態度、

能力であり、学習への意欲、学習の習得、学習を続ける意志をその内容としている。

また、大学審議会が目指す「21世紀の大学像」では、活力ある大学、課題探求能力の育成、教育、研究の柔軟化および生涯学習の拠点としての機能などが提言されている。発展しつづける医療社会の高度化、専門化を踏まえ、臨床検査技師および看護師、保健師は時代の要請に対応できる資質を身につけなければならない。本研究ではその資質の基盤となる自己教育力の育成を中心に、学生の現状とこれからの教育のあり方に向けて検討することと今後の課題の見通しを明らかにしたい。

## II. 先行研究の検討

「自己教育力」をキーワードとして『医学中央雑誌』を中心に文献を検索した。そこで抽出された125件の先行する研究を踏まえ、本研究会<sup>2)</sup>の目的に照らして次のような検討を行った。

### 1. 自己教育力の定義

「自己教育力」を用語として政策的に最初に用いた中央教育審議会は、「自己教育力は主体的に学ぶ意志、態度、能力であり、学習への意欲、学習の習得、学習を続ける意志をその内容とする」と提唱した。その流れは、1996年に第15期中央教育審議会で、「生きる力—自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力。自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感謝する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力—」と用語を変えて述べられているが、その意味内容は、自己教育力の重要性を示している。

梶田<sup>1)</sup>は、自己教育を「教育の基本的かつ本質的な願い」だと述べ、「自己教育とは、結局のところ、その人の生き方にほかならない。自らの接するところ体験するところのすべてを、自己の認識の拡大深化のための糧とし、自己成長のためのきっかけとする、というのが自己教育である」としている。内容として、自己教育を目指す教育がどのような性格、内容を持つ教育活動であるかを想定し、学ぶ側一人ひとりの自己教育性が身についた姿を考えている。具体的には、自己教育性が備わっている姿として、基本的志向性としての「自己成長性」と、それを実現していく方法技能としての「自学自習の力」を二つの柱に掲げた。さらに、研究を進め、自己教育の構えと力である自己教育性を、重要な意義をもつ四つの側面に整理した。それが、「自己教育を行っていく上での基本的な志向性（Ⅰ）、その志向性に沿って自分自身を一步一步自ら前進させていく力（Ⅱ）、その前進の過程で道具的な意味を持つ学び方や基礎学力（Ⅲ）および、そうした全てを一人の人格の中に落ち着かせ、安定した土台の上に立っての前進を可能にする心理的基盤（Ⅳ）」であるとされた。そしてそれを、「Ⅰ 成長・発展への志向性」、「Ⅱ 自己の対象化と統制（コントロール）」、「Ⅲ 学習の技能と基盤」、「Ⅳ 自信・プライド・安定

性」と表現した。

自己教育力をもつ学生を育成するにあたり、まず、学生の自己教育力の実態を把握し、現状を検討することが必要である。その特性を踏まえた上で、有効な教育方法を組み立てていくことができるであろう。

### 2. 自己教育力の調査指標

自己教育力の尺度として用いられている調査票として、代表的な3種類が挙げられる。酒井<sup>2)</sup>の調査では、1991年から2002年までの調査票を用いた研究のうち、半数弱が梶田の自己教育性調査票、2割弱が西村<sup>3)</sup>らによって梶田の調査票を検討追加した自己教育性調査票、4件が永野<sup>4)</sup>の日本語版 Self-Directed Learning Readiness Scale (SDLRS-J) を用いていた。

#### 1) 梶田の自己教育性調査票

前述の（Ⅰ）～（Ⅳ）の側面に沿って検討され、自己教育性のⅠ、Ⅱ、Ⅲの側面が具体的に子どもたちにどのように実現しているかを見るために、それぞれ10項目の内容からなる合計30項目の調査票が掲げられている。第一の側面「成長、発展への志向」は、自分自身の行動や技能の領域やレパートリーが、より広いもの、より高度なものとなるように願う、といった構えを持つことである。その中には、自分で目指すべき方向についての感覚を育てていくと同時に、目標やモデル、あるいは自分自身に対して持つ期待を自分なりにはっきりさせるよう働きかけるという「目標の感覚・意識」の視点と、身体的基盤を伴う心身のやる気を持つという「達成と向上の意欲」の視点で構成されている。具体的な質問内容として、「私は、たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」などがある。第二の側面「自己の対象化と統制」は、自分自身の現状と可能性、課題等を認識し、自分自身が選びとった方向へ自分自身が近づくように働きかける、という構えと能力である。その中には、自らを素直にありのまま認識しようとする姿勢と能力を重要とし、自己認識や自己評価が社会性を持つことを目指す「自己認識と評価の力」の視点と、自分自身をコントロールし、一定の方向へ向けていく力である「自己統制の力」の視点で構成されている。具体的な質問内容として、「私は、他の人から欠点を指摘されると、自分でも考えてみようとする」などがある。第三の側面「学習の技能と基盤」は、学校教育で直接的に形成され

る具体的な形での学力である。その中には、自学自習のための知識や技能であり、情報を自分なりに収集し処理する知識や能力である「学び方の知識と技能」の視点と、各教科で基礎・基本となる学習の理解と技能である「基礎的基本的な学力」の視点で構成されている。この側面は、学習によって獲得していくという要素が強いため、他の側面とは性質が異なるため、調査項目として挙がってきていない。第四の側面「自信・プライド・安定性」は、三つの側面を最も深いところにおいて支えている心理的な安定性の側面である。具体的な質問内容として、「私は、自分にもいろいろとリエがあると思う」などがある。

## 2) 西村の自己教育力尺度

西村は、梶田の未作成の第三の側面の項目を作成し、第一、第二、第四の側面の内容についても一部修正検討を加え、質問内容の信頼性と妥当性を検討した。作成された第三の側面の具体的な内容は「自分の調べたいことについて文献検索をしていくことができる」等の10項目である。検討の対象として、看護研修の卒業生に作成した40項目の調査と看護職アイデンティティとの関係の分析を行っている。その結果、尺度の各側面は、妥当な下位項目から構成されており、自己教育力の内的整合性、信頼性、および看護職アイデンティティとの併存的妥当性が検証されたとしている。今後の課題として、この研究において自己教育力の測定に一応有効であることが確認されたが、因子分析による全分散の寄与率が低い点、多様な対象者による調査、下位項目別の詳細な検討等が挙げられている。

## 3) 永野の日本語版 Self-Directed Learning Readiness Scale (SDLRS-J)

永野は、看護師の自己教育力を測定するために、Guglielminoが開発したSelf-Directed Learning Readiness Scale (SDLRS)を、逆翻訳の手法を用いて日本語に翻訳し、SDLRSの日本語版(SDLRS-J)を作成した。SDLRSは、高等学校以上の教育を受けた成人を対象とし、自己教育に必要な態度や行動に関する57項目から構成されている。評定は5段階で、総得点が高いほど自己教育力が高いことを示し、信頼性および妥当性は確保されていると述べられている。SDLRS-Jの具体的な項目として、「学んだことの責任は、ほかの誰でもない自分にある」、「わからない情報をどこで手に入れられるか知って

いる」などがある。この研究では、無作為抽出した全国の病院に勤務する看護師を対象とし、看護師の自己教育力の特徴が示唆されている。因子分析による構成因子は、「学習機会の開拓」、「創造性」、「将来の見通し」、「効果的な学習者であるという自己概念」、「学習における主導権と独立」、「学ぶことに対する自己の責任の受容」、「学ぶことへの愛情」、「基本的な学習技能と問題解決技能を用いる能力」の8つである。課題としては、看護師の自己教育力の特徴を明確にして、一般化が可能な対象数を確保し、自己教育力との関係を検証する必要があると述べられている。

## 3. 教育効果を明確にするための関連要因

「自己教育力に影響する因子」を検討するにあたり、学生の自己教育力の実態、関連因子をキーワードに文献を検討した。以下、それぞれについて概観する。

### 1) 学生の実態について

看護学生の自己教育力を横断的に調査した森<sup>5)</sup>らは、3年過程の看護短期大学1年次から3年次の学生を対象として、梶田の30項目を用いて調査している。結果として、学年差が見られた7項目に学年が進むに従って数値が上昇する項目と低下する項目が混在していて、一定の傾向を見出すことが出来ない。同様に、梶田が述べたI・II・IIIの側面についても、一定の傾向が見られない。そこで、30項目についての因子分析(バリマックス回転法)を行い、学年別の因子得点および因子構造を比較している。「プライド因子」について、3年次学生は、1年次学生に比べて低い。1年次学生と2年次学生は因子構造に共通性が見られたが、3年生は異なる傾向にある、等が明らかになった。

4年制大学生と看護専門学校生の比較を行った岩永<sup>6)</sup>は、梶田の調査項目を用いて看護学生の自己教育力の構造因子について検討した。因子分析の結果、現在の自分に対する自信やプライドを表わす第1因子「自己肯定因子」、第2因子「将来への期待因子」、自分自身で課題を見つけ、目標を定めてそれを達成しようとする意欲を持つ第3因子「非目標達成因子」、自分自身の目標に向かって一步一步行動を起こす力を表す第4因子「非行動統制因子」、自己の認識に関わり、ありのままの自分を認識し、他者がどのように自分を認識しているのかを素直に

耳を傾ける力を表わす第5因子「感情統制因子」を抽出した。また、自己教育合計点および第1, 3, 5因子の因子得点の差から、看護大学生の自己教育力の特徴として、専門学校生よりも自己教育力が高いと推測した。学年間の自己教育力の差を検討した結果においては、「将来への期待因子」で、4年次生が1, 2, 3年次生に比べて低く、他の因子に学年差は見られなかった。その背景として、4年次は臨床実習を通して自分と向き合う機会が増え、また実際の看護を体験して長期的な目標を修正したと述べられている。

看護大学生の自己教育力を縦断的に調査した二ツ森<sup>7)</sup>は、同一学生における4年間の自己教育力の構造とその変化を梶田の調査票を用いて検討した。結果として、自己教育力の総合平均値は3年次まで上昇し、4年次で低下（特に「プライド因子」の平均値が低下）しており、その背景として習得した知識、技術の深まりによる自己評価の厳しさを挙げている。しかし、4年次では「自己統制力因子」が最も上昇していることから、自己教育力を支える原動力を獲得していると結論づけている。

なお、臨床検査技師の学生に対する自己教育力の調査は見当たらないが、吉村<sup>8)</sup>は、免疫学実習における学習意欲について、菅原の心理尺度を用いて学習への興味および関心を検討している。

## 2) 影響する要因との関係

自己教育力に関する看護学生を対象とした初期の研究として、看護短期大学の学生を横断的に調査した佐藤ら<sup>9)</sup>は、梶田の調査票を用いて因子の抽出と、学年間の特徴、影響する要因を検討した。結果として、6因子を抽出し、「プライド因子」の学年差（1年次学生より3年次学生のほうが低い）を見出した。また、同時に調査した挫折体験の有無別比較で、「プライド因子」および「自己統制力因子」において、挫折体験のある者が負に、ない者が正に負荷しており、自己教育力と挫折体験の関連性を示唆している。

学習方法の視点から自己教育力を捉えた本田ら<sup>10)</sup>は、看護学校7校1年次の学生を対象に、梶田の調査票および学習方法に関する独自の質問項目を用いて検討した。その結果、学習力がついたと回答した学習方法は、一斉講義、グループワーク、クラブ活動および実験の順でそれぞれ4割前後であった。また、学習方法の中で、ディスカッションの方法が自

己教育力の「自己向上因子」に影響を与えていることが示唆された。

その調査に引き続き同一学生の2年次の調査を行った大橋ら<sup>11)</sup>は、梶田の調査票と学習方法に対する学生の認識を問う質問項目を用いて比較検討した。結果として、自己教育力がついたと回答した学習方法は実習、演習および個別学習の順で、9割から7割の学生が認識している。また、自己教育力に影響を与える学習方法は、実習、講義、演習、個別学習、ディスカッションであると述べられている。

臨地実習と自己教育力の関連に関する研究は12件ある。その中で、臨地実習における看護学生の自己教育力の変化を調査している文献が2件ある。

短期大学3年次の学生に対する全実習の前後で自己教育力を調査した横山ら<sup>12)</sup>は、梶田の調査票を用いて、項目間の変化を検討した。その結果、項目の「プライド群」、「自己統制群」は実習後に低下し、目的達成学習意欲および自己認識力に関する項目は高くなった。そのことから、実習を通して学生は、知識不足や論理的な矛盾につまづき悩みながらも自己学習を繰り返し成長していると述べられている。

初期実習と授業過程評価との関係から調査した中本ら<sup>13)</sup>は、西村の調査票を用いて初期実習（6日間）前後の自己教育性を検討した。四つの側面に対する特徴は、先行研究とも一致し、目標や達成・向上への志向は高く、自信・プライド・安定性が低い。一方、実習前後での変化をみると、先行研究では実習後に低下すると報告のある「自信・プライド・安定性」の側面が実習後に高くなっていることが特筆される。その背景として、教員のプラスのストロークを意識した指導助言が挙げられている。さらに、教員による適切なオリエンテーションや学生に対する適切な対応や指導、臨地側スタッフとの指導の一貫性が、学生の学習に向かう姿勢を整えるのに重要であることを示唆している。

自己教育力と家庭での学習状況との関連を調査した佐藤ら<sup>14)</sup>は、看護短期大学生を対象に、梶田の調査票を用いて横断的に検討した。自己教育力形成の一因となる「家庭における学習状況」と自己教育力との関連を明らかにするために、学習状況についての調査項目は、学習時間、学習の計画性および計画に基づく実行、予習・復習状況ならびに学習方法等を挙げた。自己教育力因子得点と学習状況との関連を、学習の計画性と平均因子得点をそれぞれの因

子で比較した結果として、「数日～1週間以内」に計画して学習している学生は自信喪失が高く、「その日のみ」、「学期・月単位」に計画して学習している学生は自信を持っていることが認められた。この結果は、3年次学生が最も顕著であった。予習・復習の実践力と目標に向かう姿勢は深い関連があると推察された。

### Ⅲ. 結 論

以上のことから、自己教育力に関する今後の検討課題として、次のようなことが挙げられる。

- 1) 看護教育の領域では自己教育力に関する調査研究が活発に行われてきているが、他の医療の領域における研究はほとんど見当たらない。看護教育以外の領域での調査、およびそれらと看護教育で得られた知見との比較が必要である。
- 2) 学年間の比較は行われているが、縦断的な研究への取り組みがほとんど行われていない。同一対象についての長期的変化を追う必要がある。
- 3) 自己教育力のイベントの影響に関する諸研究は多くないが、それらはほとんど臨地実習の影響を対象としている。学生生活における自己教育力育成の契機を更に検討していくために、それ以外のイベントの影響を短期・長期的に観察・調査する必要がある。
- 4) 実習後に「自信・プライド・安定性」の側面が、低下したという報告と、上昇したという報告とがある。この一見相反する結果が問題の重層性を反映しているのとらえ、更に影響因子の分析をすすめる必要がある。

#### 注) 自己教育力研究会の設立と活動目標

熊本保健科学大学は、「保健医療の分野に関する専門知識、技術の教育と研究を行い、教養教育を通じて人間および社会に対する幅広く深い理解力を獲得せしめ、豊かな人間性を備え、国民の保健衛生並びに医療に寄与できる、高度な技術を身につけた創造性に富む、活力ある人材を育成する」ことを基本理念に掲げ、平成15年4月に開学した。本学で学ぶ学生が、4年間さらにそれ以降も自ら主体的

に学習する意志、態度、能力、すなわち自己教育力を育成して、学生自身の学習意欲を継続することは重要な課題となる。これらを踏まえ、本学の衛生技術学科および看護学科(以下、両学科と略す)の有志を募り、学生の自己教育力の育成に努めることを目的に本研究会を設立した。当面の課題としては、学生の学習意欲における自己教育力の現状を調査すること、その結果を客観的データとして学生の学習行動と対比して分析し、教育効果を明らかにすることなどを目標にあげて活動している。

### 文 献

- 1) 梶田叡一：自己教育への教育。明治図書、1985。
- 2) 酒井明子：今、看護に必要な力——自己教育力——自己教育力に関する文献学的考察。Quality Nursing, 9 (12) : 56-64, 2003。
- 3) 西村千代子, 奥野茂代, 小林洋子他：看護婦の自己教育力——自己教育力測定尺度の検討——。日本赤十字社幹部看護婦研究所紀要, 11 : 22-39, 1995。
- 4) 永野光子, 舟島なをみ：臨床看護婦・士の自己教育力と看護婦・士特性との関係。順天堂医療短期大学紀要, 13 : 1-10, 2002。
- 5) 森千鶴, 佐藤みつ子, 森下節子他：看護短期大学学生の自己教育力に関する研究——学生別に見た自己教育力に関するアンケートの所見——。日本看護研究学会雑誌, 15 (4) : 24-34, 1992。
- 6) 岩永秀子：看護学生の自己教育力——4年制大学生と看護専門学校生の比較。Quality Nursing, 2 (11) : 49-56, 1996。
- 7) ニッ森栄子：看護大学生の自己教育力に関する断続的研究——在学4年間の自己教育力の変化に焦点をあてて。日本看護学教育学会講演集, 15 : 186, 2003。
- 8) 吉村幸子：免疫学実習における学習意欲について。医学検査, 48 (4) : 763, 1999。
- 9) 佐藤みつ子, 森千鶴, 森下節子：看護学生の「自己教育力」に関する要因について。日本看護学会集録, 22 : 201-203, 1991。
- 10) 本田英子, 衛藤英子, 大橋富士子他：看護学生

- の自己教育力に影響する因子 — 学習方法の視点から. 日本看護学会集録, 27:146-148, 1996.
- 11) 大橋富士子, 衛藤英子, 菊池恭子他: 看護学生2年生の自己教育力の構造とそれに影響する因子 — 同一学生の縦断的調査より. 日本看護学会集録, 28:121-124, 1997.
- 12) 横山ハツミ, 山口求: 臨地実習における看護学生の自己教育力の変化に関する考察. 日本看護研究学会雑誌, 21(3):162, 1998.
- 13) 中本啓子, 西川しづえ, 新實夕香理他: 初めての隣地実習における自己教育性の変化と授業過程評価との関係. 日本看護研究学会雑誌, 26(3):423, 2003.
- 14) 佐藤みつ子, 森千鶴: 自己教育力と家庭での学習状況との関連. 山梨医大紀要, 15:22-27, 1998.
- 小林洋子, 西村千代子, 奥野茂代他: 看護婦の自己教育力の変化 - 看護継続教育終了1年後の自己教育に関連する要因. 看護教育, 40(2):127-133, 1999.
- 酒井明子: 看護学生の自己教育力に関連する要因 — self-esteemの高低に焦点をあてて — . 福井医科大学研究雑誌, 1(1):113-129, 2000.
- 酒井明子: 今, 看護に必要な力 — 自己教育力 — 自己教育力の概念と関連概念. Quality Nursing, 9(11):63-69, 2003
- 田島桂子: 今, 看護に必要な力 — 自己教育力 — 連載を始めるにあたって. Quality Nursing, 9(10):71-75, 2003.
- 田島桂子: 看護実践能力育成に向けた教育の基礎. 医学書院, 2002
- 坪田和美: 看護基礎教育における自己教育力 — 実態調査からの考案 — . 看護教育, 44(3):242-244, 2003.
- 根本敬子, 鈴木一枝, 米澤弘志他: 自己教育力と基礎看護技術到達度に関する検討. 看護教育, 26:139-141, 1995.
- パトリシア・A・クラントン, 入江直子他(訳): おとなの学びを拓く — 自己決定と意識変容を目指して. 鳳書房, 2002.
- Carolyn Mary Byrne(著), 小山真理子(訳): 看護教育方法の改革: Problem Based Learning(PBL)の導入. 看護教育, 37(3):193-199, 1996.
- (平成16年1月30日受理)
- 西谷美幸, 永田華千代, 徳永郁子, 大澤早苗, 岩瀬裕子, 内山久美, 梅橋操子, 亀山亜弓, 川端伸次, 川本起久子, 北野正文, 古賀和子, 嶋田かをる, 多久島寛孝, 田中英子, 三村孝俊, 山口裕子, 弓掛和恵, 吉田一子, 山本勝則, 井上悦子  
〒861-5598 熊本市和泉町325番地  
熊本保健科学大学 看護学科

## The Motivation and Effect of Self-Education : Establishment of the Commission to Self-Education and Brief Overview

Miyuki NISHITANI, Hanachiyo NAGATA, Ikuko TOKUNAGA,  
Sanae OSAWA, Hiroko IWASE, Kumi UCHIYAMA, Misako UMEHASHI,  
Ayumi KAMEYAMA, Shinji KAWABATA, Kikuko KAWAMOTO,  
Masafumi KITANO, Kazuko KOGA, Kaoru SHIMADA, Hirotaka TAKUSHIMA,  
Eiko TANAKA, Takatoshi MIMURA, Yuko YAMAGUCHI,  
Kazue YUMIKAKE, Ichiko YOSHIDA, Katsunori YAMAMOTO, Etuko INOUE

### Abstract

College students would be expected to be self-directive in learning, and the curriculum could have been made considering the students' self-directed learning ability. In order to find out a state of study on self-directed learning, a literature review through search engine "Japana Centra Revuo Medicina" was conducted, and the findings were shown as follows:

- 1) The subjects from nursing school were often chosen for the studies of self-directed learning; however, not from other health fields. The comparison among students in nursing and other health fields would be necessary.
- 2) The comparative descriptive design had been used in the studies of self-directed learning, and longitudinal design could be suggested to obtain the changes from the same sample.
- 3) There were not many studies on self-directed learning, and most of them were conducted on the practicum setting. Therefore, it might be significant to find out the effectiveness of the other school events on self-directed learning ability rather than the practicum.
- 4) One of four factors for self-directed learning, called "confidence/pride/ stability" factor(Kajita, 1985), was effected by the nursing practicum(Yokoyama et al. 1998 ; Nakamoto et al. 2003). It would be necessary to study more details in order to find out what would be needed to enhance the ability of self-directed learning.